

慶應義塾大学 SFC における ドイツ語海外研修とその準備コース

平 高 史 也

1. 外国語科目としての海外研修—SFC の場合—

本稿は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下「SFC」と略す）ドイツ語研究室で行っているドイツ語海外研修とその準備コースについて述べ、今後の課題を探ることを目的とする¹⁾。

SFCのドイツ語研究室ではキャンパス開設後2年目の1991年度に、当時の訪問講師 Andreas Hendrich のイニシアティブでドイツでの海外研修を始めた。当時は、参加学生は同じ飛行機で Frankfurt まで行き、Göttingen, Bielefeld などドイツ国内に数ヶ所ある民間の Tandem というドイツ語学校に数名ずつ分かれて3, 4週間のドイツ語コースに参加するという形態をとっていた。また、Erlangen 大学日本学科を中心とする有志のご協力を得て、訪問講師 Andreas Riessland が数名のグループを引率して渡独したこともあった。このときは DAAD のご支援により、Köln で1週間過ごすというプログラムをつけ加えて実施した。しかし、いずれの研修も大学の授業の単位として認められるものではなかった。

その後、SFC では海外研修を正規の授業として位置づけ、単位化しようという方向へキャンパス全体が動き出した。ドイツ語研究室も、ドイツ語圏の州立大学が開催する夏季ドイツ語研修のうち、授業時間が3週間合計45時間以上のコースを「海外研修(ドイツ語)」という科目の対象として2単位を認定する制度を1999年度に開始し、現在に至っている²⁾。

2. ドイツ語海外研修

2.1. ドイツ語科目の中での位置づけ

ドイツ語研究室ではインテンシブコース(1週50分授業8コマ。1学期13週で4単位取得)、ベーシックコース(1週90分授業2コマ。1学期13週で2単位取得)、スキルモジュラー科目(1週90分授業1コマ。1学期13週で1単位取得)、コンテンツモジュラー

1) 草稿に藁谷郁美氏(慶應義塾大学総合政策学部)からコメントをいただいた。記して感謝申し上げます。

2) 後述するように、その後、ドイツ国内のゲーテ・インスティトゥートが開催するコースが「海外研修(ドイツ語)」の対象に加わった。

科目(1週90分授業1コマ。1学期13週で2単位取得)の各コースのほかに「海外研修(ドイツ語)」(2単位)を設置している。学生がドイツ語圏の州立大学またはゲーテ・インスティトゥートで開講されるドイツ語研修に参加するために渡航するのは主に夏休みである。帰国後の秋学期に履修申告をし、下で述べる条件を満たせば、2単位が付与される。ドイツ語研究室で開発している教材を使用するインテンシブコースのⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期のうち最初の2期がSFCや藤沢、日本を舞台にした場面設定になっているのに対して、Ⅲ期は日本語を母語とする学習者が夏休みに海外研修に参加するためにドイツに行く、という設定になっている。そのため、ドイツ語研究室ではこのⅢ期を履修した後でドイツ語研修に参加することを勧めている。しかし、実際にはⅡ期を終了した段階でドイツ語圏に行き、語学研修に参加する学生も少なくない。その結果、ドイツ語学習に対するモチベーションが高まり、帰国後、インテンシブコースのⅢ期を履修するという学生もいる。Ⅱ期あるいはⅢ期、いずれの終了後に海外に行くのが効果的なのかについては、データもないので厳密にはわからないが、今後はいずれの段階でも効果があがるような態勢作りが必要であろう。

2.2. 引率型から短期留学型の研修へ

海外での語学研修では、数十名のグループを教員が引率して渡航するというタイプが主流であろう。この引率型の研修では、教員が同行しているので学生の安全確保には十全の態勢がとれるという長所がある半面、多くの場合、海外に行っても国内と同じ学生たちが同じクラスで勉強しているという欠点がある。SFCでは、学生が一人一人各大学のホームページから参加申請を行い、渡航の準備からすべて一人で行うという形式をとっている。海外のドイツ語コースに参加しても、SFCでの授業と同じメンバーがいるというよりは、通常の大学のサマーコースで世界各地からの参加者といっしょに学ぶ環境に身を置いて自主性を養うほうが効果的であると考えからである。教員は、後で述べる「海外研修準備コース」で学生を支援したり、研修参加地を訪れて参加学生の様子を見たり、研修先の大学の担当者と研修内容に関して話をするなど、どちらかというと背後に回っての役割を演じることが多い。

2.3. これまでの実績

1999年度夏以来過去4年間の行き先大学別参加者数は表1のとおりである。この表には春季研修の参加者数は含まれていないが、すでに述べたように、春休みに外国人向けのドイツ語研修を行う大学はごく限られているので、参加者の行き先大学のおよその傾向は表1に示されているといえる³⁾。

3) 2000年度、2002年度は、日独協会主催によるインターンシップ・プログラムに参加した学生が多かったため、海外研修参加者が多少減っている。

表1：行き先大学別参加者一覧

	1999	2000	2001	2002
Aachen (FH)				3
Bayreuth	1		2	
Berlin (FU)			1	
Bonn	6	3	3	1
Braunschweig (TU)	1		2	
Bremen	3	1	1	
Bremen (FH)		1		
Dresden (TU)		1	2	
Düsseldorf		3	2	1
Erfurt			1	
Erlangen				2
Freiburg	2	3		1
Göttingen		1	2	
Heidelberg		2	3	
Kassel		1		
Köln (FH)	5	2		
Mainz			1	1
Marburg	1			
München	1			2
Salzburg			1	
Siegen	1	1		
Tübingen			1	
Weimar		1	1	2
Wien			2	
TOTAL	21	20	25	13

FH = Fachhochschule

2.4. 単位の認定

夏季ドイツ語研修に参加した学生は、帰国直後の秋学期の履修登録時に他の科目と併しに「海外研修(ドイツ語)」という科目の履修を申告する。これによって、希望する学生は「海外研修(ドイツ語)」の単位を申請したことになる。履修申告をした学生がこの科目の2単位を取得するには、次の課題を提出しなくてはならない。それをドイツ語研究室

が審査して成績評価を出している。

- 1) 主催大学が発行する参加証(修了証)のコピー:通常は最終日のテストの後に交付される。成績が明記されているものも多い。
- 2) 申し込みの段階から帰国までの日誌:提出を前提とした日誌で、目的は異文化、異言語との出会いにどう気づき、どのように意識したか、またそれがどう変わっていくのか(いかないのか)などを知る点にある。
- 3) フィールドワークの成果:関心のあるテーマについて渡独前から調査を始め(例えば、ドイツのどこへ行けばわかるかなど)、現地で研修の合間をぬって調査し、その結果をまとめて提出する。テーマや手法は問わない。

このうち2)、3)は日本語で記述してよいことになっている。また、形式もレポートだけではなく、WEBサイトやCD-ROM、建築模型などさまざまである。3)のテーマ例をいくつか挙げれば、「強制収容所における売春施設の存在—ダッハウ強制収容所で初めて知ったこと—」、「ダッハウ・レポート」、「日独のカメラの価格差に見るドイツにおける写真機観」、「西洋における『日本人観光客』というイメージ」、「GEIGE」、「中世ドイツにおける犯罪」、「フライブルクの交通政策」、「『ゴミ』から見るドイツ」、「ドイツでのテクノ・ミュージックの特徴」、「ケルン市内の芸術作品のオブジェについて」等々ということになる。

3. 海外研修準備コース

1999年度に海外研修を単位化した頃は、準備コースはオリエンテーションとして1学期に数回放課後に実施するのみであったが、2000年度からスキルモジュラー科目の一つとして春学期に開講し、週に1回90分授業1コマで13回行っている。この授業は夏休みにドイツ語圏の大学に研修に行く予定の学生にはできるだけ出席するように勧めているが、時間割の関係で履修できない学生には配布資料を渡すなどして、授業で扱った内容は伝えるようにつとめている。昨年度、今年度はこのコースを秋学期にも開講したが、春休みはドイツ語研修を行う大学が少ないため、ドイツ語研修に参加する学生はきわめて少ない。したがって、秋学期に授業として開講するかどうかは今後は再考を要する。

3.1. 目的とシラバス

海外研修準備コース(90分授業週1コマ春学期開講)の目的は、主として夏休みにドイツ語圏の州立大学でドイツ語研修に参加する予定の学生を対象に、約1ヶ月のドイツ語圏での滞在大過なく終えられるように最低限の言語、文化、社会に関する知識を与え、研修の準備を行うことにある。ここでいう「知識を与える」というのは、頭の中に知識を蓄積することではなく、ドイツ語圏で生活し、そこで出会うさまざまな問題を自分で解決す

るための運用能力の養成とでもいうべきものである。この授業のシラバスはおよそ表2のようである。

表2：海外研修準備コース・シラバス

週	内 容
1	ドイツ語夏季研修プログラムの概要と単位取得条件，大学生協旅行担当者による渡航準備等の説明（参加大学の探し方，申請と送金，受け入れ承諾までを大学のWEBサイトの具体例を示して説明）
2	自己紹介（自分について人前で話す練習。参加者は必ず1人1問発表者に質問。発信と受信）
3	ドイツとはこんなところ。先輩の体験談
4	文法用語をドイツ語で
5	緊急時のドイツ語（健康状態や病院，保険などに関わる表現）
6	ドイツ語圏の大学で最初に遭遇する場面（インテンシブコースIII期用のビデオ教材から「国際課で」，「寮で」などを使って学習）
7	ドイツ事情（ゲーテ・インスティトゥートのビデオを使って，学生寮での生活，学校教育としての環境問題，Umweltasche などについて考察・議論）
8	異文化トレーニング
9	ドイツの大学（DAADのVirtual University）
10	日本についての表現（ドイツ語で日本事情をどう説明するか）
11	フィールドワークについてのプレゼンテーション（1）
12	フィールドワークについてのプレゼンテーション（2）
13	直前対策

3.2. 評価

海外研修準備コースは正規の授業科目なので，このコースを履修して条件⁴⁾を満たせば，渡独するか否かにかかわらず，スキルモジュラー科目として1単位取得できる。

3.3. 準備コース以外の指導

渡独は初めてという学生が大半のため，上記の準備コース以外にオフィス・アワーなどを使って個別に指導することも多い。それは行き先大学の決定や研修後の旅行に関する相談だけでなく，WEBサイト上の申請書の書き方から，内金の送金方法など多岐にわたっている。そのため海外研修準備コースの担当教員だけでは対応が十分できないので，研修経験のあるTAやSAの中に海外研修担当者を決めておき，いわば学生アシスタント

4) 出席とフィールドワークに関するプレゼンテーションである。

のような立場からアドバイスさせるようにしている。学生アシスタントは、ほかにメーリングリストや掲示板の作成などの技術的な仕事も受け持つことになっている。

4. 教員の役割

4.1. 研修先大学の訪問

ドイツ語研究室の専任教員は毎年学生の研修先の大学を訪問し、ドイツ語研修の実態を調査するとともに、在籍中の学生に会って、様子を聞くことにしている。この訪問の目的は、不十分ながら学生の安全の確保と、次年度以降も学生に勧められる大学とそうでない大学を見極めることにある。しかし、表1に示されているように、学生の研修先は例年10数カ所の大学に分散する。そのため、毎年これらの大学すべてを訪問することは実際には難しい。そこで、例年3、4カ所の大学を選んで訪問し、事務上の担当者(多くの場合は大学のAkademisches Auslandsamtの職員)や授業の責任者と会って、コースについての説明を受けたり、授業を見学したり、SFCのドイツ語の授業について説明したりしている。特に、学生の準備期間中にトラブル⁵⁾のあった大学とは入念なミーティングを行うことにしている。

4.2. 学習者の実態把握の契機としての海外研修

SFCでは夏季研修に参加する学生の渡独前後に同じインタビューを行い、それを分析して、ドイツ語によるコミュニケーション能力がどのように変化しているのか、を調べている。また、現在はまだ実施していないが、アンケート形式で海外研修の問題点を挙げてもらう、などといった工夫も今後考えなくてはならない。同じく学生の異文化間能力もどのように変化するかも把握しておいたほうがよかろう。

5. 今後の展望

まず、制度上の改善案について記すと、現行のシステムでは海外研修科目は在学中に1度しか単位が認定されないことになっている。しかし、少数ながら海外研修に2度以上参加する学生がいることを考えると、一定の条件をつければ(例えば、2回目は1回目よりもレベルの高いコースに参加するなど)、複数回にわたって単位を付与する制度があってもいいのではないかと思う。また、現在は参加者の受け付けをドイツ語研究室が行っているが、事務的に処理できることからは事務室に任せて、教員は海外研修の研究や教育にかかわる側面に集中したほうが効率的であろう。

その研究・教育にかかわる部分でも課題は少なくない。まず、すでに着手しているインタビュー・プロジェクトの継続・強化が挙げられる。これは、広い意味でのドイツ語コ

5) 例えば、入金との連絡がない、数週間連絡が来ないなど。

コミュニケーション能力が学生の渡独前後でどう変化したかを見る研究である。これまでの予備的考察⁶⁾からは、文法能力の伸びよりも、いわゆるコミュニケーション・ストラテジーの範疇に属する能力の伸びの方が顕著であるという結果が出ている。当面の目標はインフォーマントの追加と調査の精緻化である。この調査を続ければ、日本で教えるべきことがらと、ドイツ語圏でこそ身につくことがらを峻別できるようになるだろう。

次に、学生に提出を課している日誌の分析がある。学生たちの記述からは、異文化や異言語との接触を通して自分たちが問題をいかに解決し、それによって自己を開いていったかを読みとることができる。こうした努力の跡をたどっていけば、異文化間コミュニケーション能力やドイツ語能力の開発に資する要因を抽出することができるのではないかと思われる。

海外研修に参加した学生がみな帰国後もドイツ語やドイツ語圏の国々と関わりを持ちつづけるわけではない。むしろ縁がなくなる学生の方が多いかもしれない。そういう学生たちのその後の人生にとって、学生時代に参加した海外研修はどういう意味があるのだろうか。追跡調査は容易ではないが、体験目標として海外研修がどういう役割を果たしているかを問うことは無意味ではあるまい。

今後の研究でこうした問題が少しでも明らかになれば、海外研修とその準備コースのカリキュラムにおける位置づけもより明確になり、いっそう効果的で意義のある科目として提供できるようになるだろう。

参考文献

- 平高史也・藁谷郁美 (2001) 「海外研修前後の発話分析に関する予備的考察—ドイツ語運用能力の変化はどこに現れるか—」『ドイツ語教育』第6号 S.21-34. 日本独文学会ドイツ語教育部会

6) 平高史也・藁谷郁美 (2001) 参照。